

2023 年度

学位（博士）の授与に係る論文内容の
要旨及び論文審査結果の要旨

（2024 年 3 月授与分）

北九州市立大学大学院
社会システム研究科

目 次

学位番号	学位被授与者氏名	論文題目	頁
甲第 1 1 9 号	吉田 理恵	多職種連携におけるコミュニケーションの会話分析と 連携促進のためのコミュニケーション教育の検討	1
甲第 1 2 0 号	肖 西汀	三島中洲思想研究	5
甲第 1 2 1 号	于 淼	『管子』の経済思想	8

学位被授与者氏名	吉田 理恵（よしだ りえ）
学位の名称	博士（学術）
学位番号	甲第 119 号
学位授与年月日	2024 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 4 条第 1 項該当
論文題目	多職種連携におけるコミュニケーションの会話分析と 連携促進のためのコミュニケーション教育の検討
論文題目（英訳または和訳）	Analyzing Conversations in Interprofessional Work and Exploring Communication Education for the Enhancement of Collaborative Work
論文審査委員	論文審査委員会委員主査： 北九州市立大学文学部 教授 博士（心理学） 田島 司 同審査委員： 北九州市立大学特任教授 博士（心理学） 松尾 太加志 同審査委員： 北九州市立大学大学院マシナリ研究科 教授 博士（教育学） 松田 憲
論文審査機関	北九州市立大学大学院社会システム研究科
審査の方法	北九州市立大学学位規程（平成 17 年 4 月 1 日大学規程第 79 号）第 10 条各号 の規定に基づく学位授与判定による
論文内容の要旨	本論文は、チーム医療における多職種間のコミュニケーションに焦点をあて、実際のコミュニケーション場面で、情報や目的の共有がどのようなプロセスでなされているのか会話分析を行い、そこで明らかになった課題を解決するために、教育場面でどのような教育が必要であるかを提案した論文である。 論文は序章を含め 5 つの章で構成されている。序章では、医療連携が推進されているものの、多職種間でのコミュニケーションが十分ではない現状があり、多職種連携教育の必要性を論じている。そこで本論文の目的として 3 つを挙げている。第一は連携としてのコミュニケーションとは何か明確にし、多職種間でのコミュニケーションの特徴や課題を理論的に検討することである。第二は実際に医療現場で行われているコミュニケーション場면을分析し、医療者に求められている連携促進のコミュニケーションのあり方について提言することである。最後は医療連携を促進させるためのコミュニケーション教育の提案である。 第 1 章では、医療連携におけるコミュニケーションにどのような課題があるのかを先行研究などから論じており、先行研究においては質問紙や面接によるものが多く、実際の対話場面での分析がなされていないことを指摘している。 第 2 章では、実際に分析を行うにあたって、連携におけるコミュニケーションのモデルを提案している。松尾のコミュニケーションモデルをベースにし、お互いがどのような枠組みで問題等を捉えているのかのメンタルモデルを共有することが重要であるということを述べている。うまくメンタルモデルを共有するために、SBAR というコミュニケーションツールにおける状況（S:situation）、背景（B:background）、アセスメント（A:assessment）、提案（R:recommendation）の 4 つの要素がコミュニケーションで共有できているかどうかが必要となり、SBAR を分析場面でも用いることを論じている。

さらに、コミュニケーションによって、連携がどのような形で進展していくのかを4段階として提起している。「問題の枠組みの共有化」、「問題の焦点化」、「目標の共有化」、「行動化の提案」の4段階である。患者が抱えている問題が明らかになり、その解決のために何を目標とするのかを共有し、それぞれの職種でどのような行動をすべきかの提案に至るまでのプロセスの段階を示している。

第3章では、実際の医療現場でのコミュニケーションの分析を行っている。リハビリテーション病院において看護師と作業療法士あるいは看護師と理学療法士の2者間の対話場面で、4場面の会話を分析した。4つの場面は、患者が自宅退院する際の問題点を共有する場面、退院支援として患者の自立度をあげるための情報を共有する場面、家族支援に向けて患者の状況を共有する場面、リハビリテーションの状況と病棟での状況を共有する場面であった。各場面では3ないし4の話題についてコミュニケーションがなされており、分析は話題ごとに行ったため、13の会話が対象となった。

分析には、第2章で検討したメンタルモデルの構築、会話におけるSBAR要素、連携のプロセス段階の進捗の観点から分析した。さらに個別の会話場面の分析だけではなく、全体を通して、SBARや連携のプロセス段階の観点からコミュニケーションの特徴と課題について検討した。

知識や経験を共有する職種間での会話では、アセスメント(A)は省略されてもメンタルモデルは共有されるが、知識や経験が異なる他職種間の場合は、意図的にアセスメントを言語化しなければ連携メンタルモデルは共有されにくいことが考えられた。2者間の専門性の違いや経験の違いがある場合には、会話が一方的になってしまう傾向があることが見出された。

また、「問題の枠組みの共有」の段階では、気がかりな状況(S)としての「問題の枠組み」が共有されるまで質問が繰り返されるという特徴がみられた。さらに、気がかりな状況(S)を共有したことを言語化しないまま、アセスメント(A)をするために質問を繰り返し、会話が停滞するといったことが見られた。

このような分析をもとに、連携プロセスの各段階でどのような情報を言語化して伝えるべきなのかをSBARの要素の観点からまとめた。

第4章では、第3章で明らかになった課題をもとに、医療連携を目的としたコミュニケーション教育のあり方を提案している。4年制の大学で看護やリハビリ関係の学部学科が共存していることを想定した教育プログラムで、他者と異なった考えを伝えるスキルをつけるとともに、異なる考えを養うことを目的とした演習形式の授業を提案した。ひとつの事例をもとにカンファレンスを行う形式の演習とし、低学年と高学年で行う演習を提案している。低学年では自職種の役割を理解し、自職種の考えを明確にすることを目的とし、アサーティブコミュニケーションの習得をも目的としたものとなっている。高学年においては他職種の学生と一緒に事例を通して、自職種の考えを伝えるとともに、異なる考えを適切に取り入れること、協働としての目標を言語化することを目的としたものである。

第4章の最後では、会話の分析から明らかになった連携コミュニケーションの課題をまとめ、提案した教育にどのように活かされたかを論じ、今後の研究課題について整理している。

論文審査結果の 要旨	医療は専門が分化し、さまざまな職種の医療者がチームとして患者の治療にあたることになっている。そのため多職種間の連携が必須となっているが、それがうまくなされていない現状がある。本論文では、多職種間での連携のコミュニケーションの重要性に焦点をあて、どのようにすれば連携がうまくなされるかを検討するのが狙いであり、現在の医療現場での課題解決につながる意義ある研究である。 本論文では、実際の医療現場でのコミュニケーションの会話を分析し、そこでの多職種間のコミュニケーションの課題を抽出し、その結果をもとにどのような教育が必要であるかの提案を行っており、エビデンスに基づいた研究となっている。 従来の多職種間のコミュニケーションに関する研究の多くは、質問紙調査や面接調査であったのに対して、本論文では実際の医療現場でのコミュニケーションを観察し、会話の分析を行っているところに価値がある。その分析にあたっては、理論的な枠組みを構築した上で行っており、分析の客観性や信頼性も十分に備えていると考えられる。 理論的な検討にあたっては、一般論的なコミュニケーションではなく、患者が抱えている問題を解決するための異なった職種間での連携のコミュニケーションを念頭においたコミュニケーションモデルを構築している。そのモデルでは、コミュニケーションの2者それぞれが患者の問題をどのように頭に描いているかというメンタルモデルが共有できるかを重視している。 そのためにどのような会話の要素が含まれるべきかを SBAR を用いて分析を試みている。SBAR は本来コミュニケーションツールとして使われているものであるが、SBAR の4つの要素の分析はわかりやすく、会話の内容として何が十分で何が不足しているのかが明らかになっており、客観的で説得力ある分析となっている。さらに、連携のプロセスの段階を4つの段階で示すことで、会話の進捗に応じて、連携がどの段階まで進んでいるのかを明らかにすることができ、枠組みも構築している。この連携のプロセス段階は医療だけではなく他の分野にも当てはまる汎用性を持っている。 このような分析のやり方は、著者独自のものであり、コミュニケーションを一般論に捉えた言語学的な分析ではなく、連携を促進するためのコミュニケーション場面として、どのように考えるべきかの理論的検討をしっかりと行っている。理論的検討を行った第2章では、具体的にどのように分析するのかを具体例を交えてわかりやすく論じており、その有効性が高いことが十分に検討された上で構築されたことを裏付けるものである。 第3章での会話の分析は逐語録をもとに精緻な分析を行っている。分析は上記のメンタルモデルの共有、SBAR の要素、連携のプロセス段階の理論的な検討の上で独自の分析を行っており、オリジナリティが高く、研究の目的にかなった分析となっており、高く評価できるものである。言葉ひとつひとつを取り上げながら、話者がどのような意図でそれを発話したのか、その際のメンタルモデルがどのようなになっているのかを細かに分析し、受け手の理解やメンタルモデルについても精緻に丁寧な分析を行っており、コミュニケーションにおける課題を抽出することができている。 その結果導かれたものも、例えば SBAR の要素の中のアセスメントが十分に言語化されていないという明確な形で示されている。その結果に基づき、教育
---------------	---

場面でどのような教育を行うべきかを提案している。多職種連携のコミュニケーションの教育は一部で実施されているものの、ここでの提案は、実際の医療場面の会話分析から導きだされた課題を解決するという、目的が明確にされた教育プログラムとなっている。その内容も具体的で、4年制の大学を想定し、低学年の段階での教育と学年が進行した段階での教育の2段階で提案し、それぞれの演習の内容、その進め方も具体的に提案がなされている。

このように、本論文は医療場面における多職種連携を課題として、連携に必要なコミュニケーションをテーマとして取り上げており、実際の多職種間のコミュニケーション場面の会話分析を行うことによって、その問題点からどのような教育を行うべきかを提案しており、そこでの知見を現場で活かすことができる。著者は大学で看護教育に携わっており、このような研究は実践的で非常に意義深い研究である。

ただし、研究としての課題もいくつかみることができる。まず、分析対象となった事例が少ないことである。しかも、リハビリテーション病院における退院間近の患者さんに関する打ち合わせ場面が主なものであり、かなり限定された場面となっていた。また、会話場面が4つであったため、2者間の関係（職種の違いや経験の違い）に多様性がなかったことである。ちょうど、新型コロナ感染拡大の時期であり、新たなデータを取ることができずやむを得ないことでもあったが、多様なデータの確保が課題である。

そして、分析が分析者の主観によるところが大きい点も懸念される。分析結果を発話者本人に確認することが困難であり、指導教員からの指導や大学院ゼミでの発表場面での議論でブラッシュアップされたものとは思われるが、今後、発話分析の客観性をどう担保するかは、本論文だけに限った課題ではないが、今後の検討課題であろう。

さらに、提案された教育プログラムが机上でのものに過ぎないことである。実際に実践可能かどうかという検討も必要であり、さらにその教育の効果を検証することが求められる。短期的な課題ではなく、中長期的に検討すべきだとは思われるが、それが今後の研究の発展につながるであろう。

いくつかの研究課題はみられるものの、論文としては理論的構築、実際の現場でのコミュニケーションの分析、その結果に基づく教育プログラムの提案と、本論文として掲げた3つの目的を十分に達成されており、論文としての体裁も問題なく、学位論文として評価できるものである。

2024年2月19日に、北九州市立大学北方キャンパス本館B-403教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が博士(学術)として十分な内容であると判定した。

学位被授与者氏名	肖 西汀（しょう せいてい）
学位の名称	博士（学術）
学位番号	甲第 120 号
学位授与年月日	2024 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 4 条第 1 項該当
論文題目	三島中洲思想研究
論文題目（英訳または和訳）	A Study of Mishima Chushu's Thought
論文審査委員	論文審査委員会委員主査： 北九州市立大学文学部 教授 博士（文学） 鄧 紅 同審査委員： 北九州市立大学元文学部教授 博士（文学部） 佐藤 真人 同審査委員： 北九州市立大学外国語学部 教授 博士（文学） 堀地 明
論文審査機関	北九州市立大学大学院社会システム研究科
審査の方法	北九州市立大学学位規程（平成 17 年 4 月 1 日大学規程第 79 号）第 10 条各号の規定に基づく学位授与判定による
論文内容の要旨	本研究は、七章に分けて、幕末と明治時代の重要な思想家及び教育家である三島毅（1830 年-1919 年、字は叔遠、号は中洲）の思想を研究するものである。 「第一章 三島中洲の生涯」は、三島中洲の生涯と思想的背景に焦点を当て、家族背景、個人経験、時代背景、師承について探求した。この章は二節に分かれる。第一節「歴史的時空における三島家」では、中洲の家族状況、人生経験、時代背景を調査し、その家族歴史と成長環境を明らかにした。第二節では、中洲の師承状況を分析し、彼の学術的成長の道筋と思想体系の形成及び変遷の過程を明らかにした。 「第二章 中国古代の義利思想」は、中国古代の義利思想を整理し、三島中洲の核心思想である義利観念の根源を深く掘り下げた。「義」と「利」の思想は中国の伝統的な儒学思想において重要な地位を占めている。本節は中国古代の義利思想の源流をたどり、孔子、孟子、荀子の義利思想、宋明理学、陸王心学の発展と影響を述べた。 「第三章 三島中洲の義利思想」は、主に中洲が「義」と「利」をどのように理解し、その義利思想の特徴を探究した。中洲の義利思想は、伝統的な儒学への深い理解と批判、そして現代社会の要求への鋭敏な洞察に基づいている。彼は、道徳と経済が相互に独立した実体ではなく、相補的な関係であると考え、個人と集団、道徳と経済を理解するための新しい視角を提供した。 「第四章 三島中洲の理気哲学思想」は、三島中洲の「理」と「気」を中心とした哲学思想を探求し、理気思想、国家観、および鬼神観に分けて論じた。理気思想について、中洲は程朱の理気思想の批判、山田方谷の理気思想を継承し、王陽明の理気思想を高く評価することを通じて、理気関係の動的性と応用性を強調し、個人の自主性と主体性を重んじていた。国家観について、中洲は理気思想に基づき、国家の本質を「一大気凝結而成」と解釈し、忠義、孝行、人倫道徳が国家の倫理と政治において重要であることを強調していた。鬼神観

	において、中洲は「心の神」という概念を提出し、鬼神を物質ではない精神的実体として、人の心の中に潜在すると見なし、この観念を東洋哲学の基本思想と結びつけていた。 「第五章 三島中洲の教育思想」は、三島中洲の教育観および関連する礼法思想、競争観念を探究した。教育観について、三島中洲は全面的な教育理念を詳細に論じ、現行の教育体系が知識教育を過度に強調し、徳育と体育の重要性を軽視していると批判し、「三位一体」の教育観を提唱した。礼法思想について、中洲は、古代の礼と現代の法が精神的に一致しており、人々の行動を規範化し、社会の調和と秩序を実現することを目的としていると考える。競争観念について、中洲が競争と謙讓の二つの概念に対する深い理解と独自の見解を示した。 「おわりに」は、本研究をまとめて、三島中洲の思想の日本近代思想史における地位と後世への影響を述べた。
論文審査結果の要旨	(1) 本研究は、中洲の思想体系を探究する過程で、次のような新しい研究方法を取り入れた。1、時代背景と個人経験の融合。本研究は三島中洲の思想成果に注目するだけでなく、彼の生涯経験と時代背景との相互作用に深く分析を加えている。彼の成長過程、家族背景、師事関係、所属時代の社会・政治・文化の変遷を総合的に検討することで、多様な要因が中洲の思想体系を形成していると考えたのである。2、中洲の思想に対する全方位の解釈。本研究は従来の単一視点を打破し、儒学、政治、歴史など多角的な分野から三島中洲の思想を全面的に解釈している。特に儒学思想の解釈において、本研究は中洲の基本的な観点の分析に留まらず、彼が伝統儒学に対して行った革新と変革を探究していることを明らかにした。3、現地調査と文献研究の組み合わせ。本研究は現地調査と文献研究を組み合わせる方法を採用している。中洲の故郷や重要な歴史遺跡を訪問し、彼の思想内容を深く分析すると同時に、研究に生き生きとした歴史感と地域色を加えている。4、学際的視点の活用。本研究は三島中洲の思想を分析する際、歴史学、哲学、文学、教育学など複数の学問分野の視点を融合している。これにより、中洲の思想を探究する際に儒学の思想枠組みに限定せず、異なる分野で展開した主張と思想をより包括的かつ深く解釈し、近代日本の儒学家、思想家に対する新たな研究枠組みの中で再構築した。5、理論と実践の結合。本研究は理論と実践の結合に重きを置き、中洲の学術理論の分析だけでなく、彼の理論が実際の教育や政治活動での応用と影響を探究している。 (2) 本研究は、三島中洲の核心思想である「義利」観念を深く掘り下げるために、「第二章 中国古代の義利思想」を設けて、中国の儒学思想における「義」と「利」の起源とその発展を追及し分析した。「義」は礼儀、道德原則、合理性などに関連していること、「利」は物質的利益、効率、迅速性などに主に関連していることを明らかにした。また、中国古代の義利思想の源流をたどり、孔子、孟子、荀子、宋明理学、陸王心学の義利思想の発展と影響を探究した。孔子、孟子、荀子は共に義を重んじ利を軽視し、義利が矛盾する場合は「先義後利」の観点を提唱している。程朱理学、いわゆる朱子学は義利問題に深い関心を持ち、義利の弁を提唱し、理欲の争いを引き起こした。陸王心学は義利問題に対する探究をさらに深め、義利の弁はその倫理学の核心部分であり、個人の私欲を克服し、公共の利益を優先することを求めている。天理と人欲は単

純な対立関係ではなく、一つの全体の二つの側面であると考えている。義利思想の歴史的な発展と変遷を論じることにより、三島中洲の思想体系の儒学基礎をいっそう明らかにした。

(3) 本研究の第三章「三島中洲の義利思想」は、中洲が「義」と「利」をどのように理解し、その義利思想の特徴について四節に分けて細かく探究した。まず、中洲は「義」を道德の羅針盤と定義し、それが経済、政治、社会構造に深く根ざしていることを強調している。同時に、「利」は経済的、実用的な要求に向けた重要な概念として強調している。この基礎の上で、彼はさらに「誠」をこれら二つの上に置き、道德と真理を追求する過程での重要な役割を担うと考えている。次に、中洲は「義」の解釈を通じて、「義」と「仁」の関係について、「心即理、理即義」の概念に焦点を当てて議論する。これらの概念は、個人の内面と宇宙の法則の調和、及びこの調和が社会行動や倫理規範にどのように反映されるかを示している。そして、彼は「利」には階層があり、各階層が異なる道德的意味を持つと考えている。個人的利益を直接追求する下等の利、他人に利益をもたらしてから個人的利益を得る中等の利、より高い道德や倫理的理想を追求する上等の利を区別している。さらに、中洲の義利思想は現実主義を傾向し、柔軟性と適応性を強調し、個人と社会間の動的な相互作用を重視し、具体的な状況下での道德と経済のバランスを大切にしている。

(4) 本研究は三島中洲の理気哲学思想について、理気思想、国家観、鬼神観に分けて論じた。三島中洲の理気哲学思想は、程朱理学、山田方谷、そして王陽明の理気思想の継承、分析及び批判から出発し、応用実用を目的に再構築したことを明らかにした。この過程は、儒学の典籍における理気理論の深い解釈にとどまらず、これらの理論が個体と社会实践の層での現代的な再解釈を含んでいる。

(5) 本研究は、三島中洲の教育思想について、教育観、礼法思想、競争観に分けて論じた。中洲の教育観は、知識、徳行、体育の全面的な発展を重視し、伝統と現代の教育理念を融合した全人教育を提唱した。また、中洲の礼法に対する考え方は、社会秩序と道德規範への深い理解を示している。彼は、変革の時代背景の中で、社会の調和と秩序を維持する効果的な方法を模索した。さらに、中洲の競争観念は、生存競争と社会発展の原動力に対する独自の見解を打ち出したことを明らかにした。彼の教育思想は、日本の教育制度や教育文化に深く影響を与え、後世の日本の教育理論の発展や教育活動の実践に大きな影響を与えたとみられる。

本研究は、研究手法は新しく、構想は雄大で、研究目的は明確で、それまでの先行研究を踏まえつつ、独自の理論構造と論理で独自の中洲論を展開している。よって本論文は博士学位請求論文として十分なレベルを有し、「合格」の結論に至った次第である。

令和6年2月20日に、審査委員全員出席のもとで、3-320教室で最終試験を実施して、研究者の学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答の後に、全員一致で当該論文が博士(学術)として十分な内容であると判定した。

学位被授与者氏名	于 森（う びょう）
学位の名称	博士（学術）
学位番号	甲第 121 号
学位授与年月日	2024 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 4 条第 1 項該当
論文題目	『管子』の経済思想
論文題目（英訳または和訳）	The economic thought of Guanzi
論文審査委員	論文審査委員会委員主査： 北九州市立大学文学部 教授 博士（文学） 鄧 紅 同審査委員： 北九州市立大学元文学部教授 博士（文学部） 佐藤 真人 同審査委員： 北九州市立大学外国語学部 教授 博士（文学） 堀地 明
論文審査機関	北九州市立大学大学院社会システム研究科
審査の方法	北九州市立大学学位規程（平成 17 年 4 月 1 日大学規程第 79 号）第 10 条各号の規定に基づく学位授与判定による
論文内容の要旨	本研究は、『管子』という書物の構成、内容などを述べた上で、専ら『管子』の経済思想を研究したものである。その内容は以下の 10 章に分ける。 「始めに」では、本研究の研究対象、研究方法、論文の構成を述べた。『管子』の文章は、戦国時代から秦漢期までの長い時期に於いて、様々な作者によって書かれたものとみられる。本研究は、それぞれの文章の間に一貫した思想があるかどうかを検討した上、研究の焦点を『管子』の経済思想と経済政策の内容の究明に合わせた。 「第一章、管子と『管子』」では、管子という人の生涯と事績、『管子』という書物の構成、注釈書および先行研究を論述した。 「第二章、『管子』の思想について」では、今までの『管子』研究で明らかにした『管子』の主な思想を五節に分けて論述した。 「第三章、『管子』の中の「農」に関する経済思想」では、『管子』に出て来るすべての「農」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「農」に関する経済思想を明らかにした。「重農抑商」は『管子』の重要な経済思想で、国家は農業に対して一連の措置をとり、経済発展を調節すべきことを論述している。 「第四章、『管子』の中の「幣」に関する経済思想」では、『管子』に出て来るすべての「幣」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「幣」に関する経済思想を明らかにした。その論述はおもに貨幣の流通と経済調節という二つの方向から述べた。『管子』貨幣思想の積極的な意味を論述したうえで、その「限界」、つまり時代に合わないものも指摘した。 「第五章、『管子』の中の「賦」と「税」に関する経済思想」では、『管子』に出て来るすべての「賦」、「税」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明する。その上で、『管子』の「賦」、「税」に関する経済思想を明らかにした。税収は国の財政収入の重要な源であり、『管子』は税収を調整することによって、国

	の安定を維持することを強調している。「賦」とは、古から国家が民衆に財物や労役を割り当てて、国家を維持する重要な制度である。『管子』は「賦」が「税」と同様に、国家制度の柱で社会の安定を守る重要な政策であるとしている。 「第六章、『管子』の中の「商」と「工」に関する経済思想」では、『管子』に出て来るすべての「商」、「工」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「商」、「工」に関する経済思想を明らかにした。管子自身は商人出身なので、商業の発展を重視する政策を取っているとみられる。 「工」とは「職人」のことで、管子は、「工」を国家の統治を守り、経済を発展させる重要な手段としている。 「第七章、『管子』の中の「水」に関する経済思想」では、『管子』に出て来るすべての「水」、という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「水」、に関する経済思想を明らかにした。水は万物の源である。『管子』は自然の水利条件を利用し、経済の発展を促進するとしている。 「第八章、『管子』の中の「地」に関する経済思想」では、『管子』に出て来るすべて「地」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。古代において、土地は非常に重要な国家資源である。管子は君主が国の統治を固め、経済を発展させるためには、土地の使用を統一的に管理する必要があるとしている。 「終わりに」は、上記の研究計画による成果をまとめ、『管子』の経済思想を全面的に述べた。
論文審査結果の要旨	(1) 本研究の最大の特徴は、『管子』にみられる「農」、「幣」、「賦」、「税」、「商」、「工」、「水」および「地」などの漢字の使い方を徹底的に調べた上で、それらの字と関連のある字句、文章に現れる経済思想を論述した。それにより、管子の経済思想がいっそう詳しく究明された。 (2) 『管子』の文章は、戦国時代から秦漢期までの長い時期に於いて、様々な作者によって書かれたものとみられる。故に今までの管子研究論文は、管子の思想を断片的に考察するものが多かった。本研究は上記の研究方法を通じて、『管子』の各文章の間にいくつかの一貫した思想があると確認した上で、管子の経済思想と政策の内容が全体的に明かにされた。また、『管子』の各文章の間に不一致の思想もあることを確認して、その不一致の原因の究明に努めた。 (3) 本研究は、『管子』の各文章の間に一貫した思想として、農業重視の姿勢がみられるとしている。農業を重視することは、人民の安住の保証であり、国家統治の有力な物質的基盤であり、社会経済の発展と富国強兵を促進するための保証でもあるとしている。そのために、本研究が取り上げた「幣」、「賦」、「税」、「商」、「工」、「水」および「地」に現れる経済思想は、ほとんど農業発展のために打ち出したものである。例えば、「幣」つまり貨幣の収放によって、社会の主要消費財である穀物の価格を統制でき、貨幣の社会的購買力を安定させる役割がある。「税」の字は「禾」と「兌」からできており、国家は民から食糧を徴収し、支配者の生活に必要な食糧を供給しなければならないので、農業重視は支配者の重要使命であることを強調した。「水」と「地」はなおさら農業にとって欠かせないので、水利事業の建設や土地の整備が一層重要であるとしている。 (4) 一方、『管子』の各文章の間に不一致の思想として、本研究は「商」、「工」という文字に現われた経済思想が取り上げられた。管子自身は商人出身なので、商業の発展を重視する政策を取っている。これは一見「重農抑商」の農業思想に反するものとみられるが、管子は工業と商業は、生産力水準の向上、社会的生産と生活

	領域の拡大とともに出現した二つの経済部門として、国がよい政策を打ち出せば、この 2 つの経済部門は農業と相互依存し、相互促進し、共に発展できると考えたのである。士、農、工、商の 4 種類の職業によって、人口居住区を区分し、彼らに分業して仕事をさせ、安心して本業に従事させる。これは社会の安定と労働効率の向上に役立つとしている。 本研究は、新しい研究手法を取り上げて、独自の管子研究を展開し、上記のような研究成果が得られた。この研究方法と研究成果は学界から受け入れられるのにはまだ時間がかかるが、博士学位請求論文としてそれで十分だと考える。 論者は中国留学生のために、先行研究の検討、日本語の表現、論文の書き方に幾つかの瑕疵があったものの、全体として本論文は博士学位請求論文として十分なレベルを有し、「合格」の結論に至った次第である。 令和 6 年 2 月 20 日に、審査委員全員出席のもとで、3-320 教室で最終試験を実施して、研究者の学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答の後に、全員一致で当該論文が博士(学術)として十分な内容であると判定した。
--	---

2023 年度学位（博士）の授与に係る論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨 第 32 号 （2024 年 3 月授与分）

発行日 2024 年 3 月

編集・発行 北九州市立大学 学術振興課

〒802-8577

北九州市小倉南区北方四丁目 2 番 1 号

電話 093-964-4021